

**平成30年度第2回宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議 情報交換会
概要**

区分・会場	県南部 宮城県大河原合同庁舎 別館第2会議室
開催日時	平成31年2月1日(金) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	白石市(13), 名取市(5), 角田市(3), 岩沼市(2), 蔵王町(3), 七ヶ宿町(2), 大河原町(3), 村田町(5), 柴田町(11), 丸森町(2), 亘理町(1), 山元町(3) 合計 53名
アドバイザー (運営委員)	東北子ども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 七ヶ浜町社会福祉協議会 福祉活動専門員 小野 哲 氏(午前のみ) 宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木 守幸 氏 さわやか福祉財団 さわやかインストラクター 渡邊 典子 氏 宮城県社会福祉協議会 震災復興・地域福祉部 次長 西塚 国彦 氏
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：関係機関(者)や所属組織との連携で工夫していること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 毎月、行政・包括・社協・COで打合せを行い、様々な内容を相談したり、協議体の内容を検討している。 ○ COの日記を今後につなげるため、様式を一緒に考え試行している。 ○ 行政が委託先(CO)をほめて伸ばしてくれることが大事だと思う。 ○ ボランティア団体との連携に力を入れている。 ○ そば打ちの名人を呼んで体験した。(好評で来年も行う) ○ 有名な文化財だけでなく、地域の人しか分からない文化財を広めている。 ○ 地域包括や生涯学習課など、いろいろなところに行って地域の情報を集める。 ○ 月2回、行政と地域包括と情報交換を行っている。行政や事業所の行事に参加している。 ○ 地域包括に第2層生活支援Coを配置しており、地域包括のCO部会に行政と第1層生活支援Coが参加している。現場サイドでの情報共有を大事にしている。 ○ 地域包括と生活支援Coの連絡会議で情報共有しているが、報告がたくさんあって今後の進め方に悩んでいる。他部署の地域おこし協力隊と協力していく。 ○ 連絡会では課題共有が上手くできていない。フランクに話せる場を設けている。 ○ まちづくりや自主防災組織、健康推進などの担当課職員3人でまちづくりの意見交換を行った。庁内全体が共通言語で意見交換できる体制・環境づくりをはじめめている。 ○ 行政と受託している社協とで、思い描いている地域づくりが違っている。協議体が年1回あるが、見えてこない。10年くらいかけてでもお互いが理解しあえるようにしたい。 ○ 高齢者福祉がメインと考えている。担当課と共有が足りていないと感じる。 ○ 行政と地域包括で歩み寄りを大切にしたら、関係性が良くなった。 ○ 町全体で横断的に連携している感じがしない。 ○ 生活支援Co同士では共有できているが、上席が変わると組織全体が停滞してしまう。Coからの発信しづらい雰囲気になっている。 ○ 住民のことを一番に考え、誰が音頭を取るかではなく、近くの人から試してみることが大事。 ○ 地域包括で生活支援Coと社会福祉士の仕事を兼務している。地域に出る時は社協と一緒に協働している。 ○ 社協の第1層生活支援Coと地域包括とで、役割の共有ができていない。 ○ 地域包括の介護予防事業とのすみ分けが難しい。

- まちづくり政策課や社会福祉協議会でも地域づくりで同じような活動をしていて、課を超えて共有・協働できるように懷疑する予定。
- 市と社協とでフォーラムを開催する。情報交換は定期的に行っている。

テーマ：協議体の運営で工夫していること

- 協議体はないが地域の集いは行っている。これを協議体としても良いと思う。
- 協議体は必ず市も協力してほしい。
- 形やメンバーにこだわらないで実施している。
- 漬物やお菓子を出してワイワイガヤガヤできる雰囲気づくりに努めている。
- 活動をたくさんしている人や地域の人を協議体のメンバーにしている。
- 地域のお宝を共有する。(来年度はマップ作りを行う)
- 公民館近くで働いているベトナム人に、ベトナム料理を振る舞ってもらった。
- 公民館に来ていただき、何をしたいかざっくばらんに話をする。
- 協議体を4回開催した。地域の資源共有と活動継続についてワークした。
- 課長や課長補佐も参加した。外からの目があると刺激になって良いと感じた。
- 協議体を2回開催した。資源マップのまとめ直しと冊子作りを住民にも参加してもらう予定。
- マップで見える化済み。困りごとが出にくい。今後は「足の問題」を話し合う。
- 今後の進め方に悩んでいる。
- 毎月事務局と委託先とで情報共有を行っている。庁内連携の目的で大坂先生に講義いただいた。勉強会は今後も続けたい。
- 町と繋がっている上席が協議体で共有していても、COにはフィードバックされない。
- 組織的な判断が弱くなっている。
- 協議体にシルバー人材や商工会の方も参加しているが、意味をよく理解していない。
- 町で行うイベントなどでは住民ボランティアやシルバー人材、商工会も関わっているが、これ自体が地域づくりにつながっていることを理解していない。
- 代表者会議のような形が良くなかったことを踏まえ、社協に運営委託し、テーマにあわせて参加者を変える方法にしていく予定。
- 第1層協議体はあるが第2層にはまだない。
- 担当課からは第2層協議体は2つと言われている(県に提出した事前調査資料にも記載)が、4つの学区で説明会をするように言われて、混乱している。
- ワイワイガヤガヤではなく、発言もあまりない。
- 協議体や生活支援 Co の活動が良くわからない。
- 第1層協議体に第2層生活支援 Co がオブザーバーで参加している。

テーマ：こんなことにアドバイザー派遣をお願いしたい

- 行政職員向けに研修をお願いしたい。(角田市では市長も同席した)
- 地域にあるものをどう盛り上げていくか。
- 今あるものを探すのが大変なので、探し方を一緒に教えてほしい。
- 地域の文化財をどうするか。
- 生活支援 Co の仕事は社協で担ってきた仕事とそれほど区別がないと感じる。違いを教えていただく勉強会があると良い。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 庁内連携の調整役としてアドバイザー派遣をお願いしたい。 ○ 生活支援 Co が育休中で、社協職員が CO も兼務している。日誌について町担当課よりチェックが入り大変な状況。行政と社協の話し合いの場にアドバイザー派遣をお願いしたい。 ○ 行政や生活支援 Co が地域住民に説明しても「役場の仕事でしょう」と言われる。アドバイザーに説明していただいた方が住民も理解するのではないかと思う。 ○ 行政と良い関係性を築く方法についてアドバイザー派遣をお願いしたい。 ○ 宝物探しはある程度できたので、その次の段階で何をしたらよいか。(見える化や発表会の他) <p>テーマ：その他自由意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 柴田町の取組みでダンベル体操が15年経って実を結んだと感じている。認定率が県内でも低い。 ○ 連携のあり方に悩んでいる。 ○ つながりを持つとき、民生委員や自治会長などと認識を同じくできるような話し合いや学習の場がほしい。 ○ 住民を巻き込んだ地域づくりに副町長は理解を示しているが、町長はじめ庁内での理解が進んでいない。 ○ 異動対策として、庁舎内での勉強会は繰り返し行う必要がある。 ○ 地域住民の危機感が少ない。たとえば虐待に気づいていたのに助らえなかった地域など。少しずつでも仲間を増やすことが大事だと思う。 ○ 高齢者だけでなく、子供や障害者など、町にはいろいろな人がいる。高齢者だけではないと思う。 ○ サロンを作っているより、自分たちが支え合って元気に暮らしている住民をもっと表に出していきたい。 ○ 山元町では、災害公営住宅で地域とのかかわりが希薄化し始めている。 ○ 長が集まる協議体では行政（社協）が説明するうちに会議になってしまう。 ○ 個別支援に走る傾向がある。 ○ 宝探しのその後の展開
<p>アドバイザーよりコメント</p>	<p><大坂委員長></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 岩沼市は月1回行政・包括・社協で打合せを行っている。情報や進め方をしっかり共有できているのは良いです。また報告書も行政と受託側で一緒に作っていることも良いです。 ○ 行政が委託先の生活支援 Co をほめて育てているのも良いです。 ○ 行政が作った協議体を解散して、新たに社協がワイワイガヤガヤできる協議体を作るという意見もあり、期待しています。 ○ 今日参加した方は皆特色があります。この話し合いから学ぶことや、新たなつながりができて、とても良かったと思います。 ○ 2層の生活支援 Co と一緒に宝物探しをすると地域に入りやすかったという白石の方の意見は、ヒントになります。1層と2層のそれぞれ持っているつながりを、お互い行動することで広げていくことができます。2層のない市町では、地域をよく知っている人に置き換えればよいと思います。 ○ 同じく白石では第2層を公民館の方をお願いしていますが、公民館は非常に大

きな武器を持っています。そば打ち体験とか何かすると人が集まってきて、つながりのきっかけを多く持つことができます。また何かをやるにしても場所が狭い時には公民館で行うことができ、そういった地域の集いの場やきっかけ作りの場は大事な資源であり、そこが第2層を担うことはとても良いことだと思います。

- 丸森では小さな協議体づくりをはじめるとのことですが、とても良いと思います。小さな協議体の声を集めて町全体の協議体で共有すればよいのです。第1層協議体の良いこととして、委員の多くは団体の代表などの立場の方です。それぞれの組織に広報していただけます。そして報告会などの参加者が多くなれば、評価につながります。

<小野委員>

- 包括と社協の職員が一緒に取り組んでいる市町もあれば、別々に取り組んでいる市町もあり、連携の難しさを感じました。行政も福祉部門だけで取り組んでいる市町もあれば連携して取り組んでいる市町もあり、市町によって連携の度合いが違うことをあらためて確認しました。
- 柴田町のように、宝物探しはほぼできたところもあれば、どのように進めていけばよいのか模索中のところもあり、進み方の違いも確認できたと思います。生活支援体制整備は宝物探しからのスパイラルです。繰り返すことと話し合うことで新たなつながりができたり課題が解決することもあります。
- 協議体に関しては、あまり充実していないとの話が多かったです。まずは住民に近いところでの話し合いを大事にしながら、市町全体で話し合う場として第1層協議体を活用して下さい。小さな話し合いの積み重ねは、町全体の話し合いにつながります。
- 庁舎内連携についてのアドバイザー派遣があればとの話もできました。県の支え合い連絡会議としても、お手伝いできればと思います。

<鈴木委員>

- 協議体など、良いものをしっかり作りたい考えもありますが、ボトムアップで時間をかけて積み上げていくことも、上席からのトップダウンで一気に作ることも、どちらが良いかで悩むところです。特に行政は福祉系やまちづくり系など、組織がしっかりしているが故の難しさもあります。
- 介護予防という観点があるので福祉系に任せられがちなのは事実です。「人権や権利擁護」というキーワードを意識して地域でどうやって暮らしたいかということをやアセスメントすることで、福祉系だけではなく、まちづくり系や他の部署とも共有できることがたくさんあると思います。庁内連携も進むと思います。
- 共有できるキーワードをもとに議論をすることで、時間はかかりますが地域づくりにつながっていくと思います。
- 庁舎内の連携も大事ですが、まずは自分の組織内でこの事業を共通理解しないと、生活支援 Co が孤立してしまいます。組織でマネジメントできる立場の人が理解することで共通認識を持つことができるし、関係機関との連携も深まります。アドバイザーとして、行政や社協、包括のマネジメントする立場の人を含めた職員研修とかで支援できると思います。

<渡邊委員>

- まだ連携や共有などができていないとの話が多く出ていましたが、できているところもあります。地域で宝物を見つけてきたり、それを協議体で話したり、できているけれども、それを意識していないだけです。ここまではできているということ意識して説明することで、協議体での共有や関係者との連携が進むと思います。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 協議体がワイワイガヤガヤできないということも、宝物を住民と意味付けしていくことで、自然と話が盛り上がると思います。 ○ 連携については、大坂委員長の講義でもありましたが、福祉関係だけでなく、地域にあるさまざまな機関とつながることが大事です。生活支援 Co はつながってなくても、住民はなにかしらつながっていますので、ぜひ取り組んでください。 ○ 地域には昔から活動している団体や住民の集まりがあります。それぞれが地域を思い勉強や話し合いを重ねています。ネットワークもあります。このネットワークをつなげていけば、良い地域になると思います。 <p><西塚委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 協議体の運営で工夫していることを主に話し合いました。研修では学んでいますが、実際開催すると、やっばる会議体になってしまうところが多いようです。まずは庁舎内の方たちと連携を取って、この事業の意味を再確認して共有することが大事です。 ○ どうしても個別支援、制度やサービスへの利用につながるような方向にありますが、紙芝居や寸劇などを町内各地で行うことで、支え合いの体制づくりの必要性であったり情報などを町内にいきわたらせることによって、最終的には包括の方たちとの連携に基づいてケアマネジメントに反映され、個別支援と地域支援の懸け橋になってとても良い結果につながると思います。 ○ この事業の評価については、住民がサロンなどに関わった回数だけでなくそこで得た充実感や生きがいにつながる感じ、この地域への関心や愛着がどのくらい高まったかを指標にすべきであって、サービスをいくつ作ったかとかではないと思います。 ○ アドバイザー派遣については、住民にこの事業の意義や目指すところについてを理解いただき浸透させるのが有効な目的だとの意見がありました。また庁舎内の連携の必要性から、この部分にもアドバイザー派遣をお願いしたいという意見もありました。 <p><県及川主事></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ サロンなど新しいことをする場合、やはり足の問題（移動）が出てくることが多いです。既存のサロンなどは移動は何とかなっています。なので、なるべく絶やさぬ工夫を考えていった方が良いのではと思いました。 ○ 協議体について、まずは行政・包括・社協・生活支援 Co の4者で話し合いを続けながら、協議体の方向性を考えたりするのも良いと思います。核となる関係者でこの事業を共有することが大切だと思いました。
<p>全体講評 大坂委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ この事業が始まって4年目です。生活支援 Co や担当者が変わったり、第2層ができたりと変わってきているところもあります。重要なことは、委託元と委託先とで話し合いを続けて波長を合わせることです。その中で、今日のような集まりで得た情報を、新たな切り口にして話し合いをしてほしいと思います。 ○ 地域の方々は、ほんとにいろいろ工夫して暮らしていますので、100歳体操の後のお茶会などでぜひ暮らしぶりを聞いてください。そしてそれを意味付けして広げることが、できるだけ地域で暮らし続けることにつながります。

区分・会場	県北部 宮城県登米合同庁舎 501会議室
開催日時	平成31年2月14日(木) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	石巻市(5), 気仙沼市(7), 登米市(10), 栗原市(23), 東松島市(5), 大崎市(9), 色麻町(2), 加美町(2), 涌谷町(4), 美里町(3), 女川町(8), 南三陸町(3) 合計 81名
アドバイザー (運営委員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木 守幸 氏 宮城県社会福祉協議会 震災復興・地域福祉部 次長 西塚 国彦 氏
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：関係機関（者）や所属組織との連携で工夫していること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活支援 Co と行政とでメール等で訪問先などの情報を共有している。 ○ 関係課を地域発信で呼んでもらう。 ○ 事業を始める時の情報整理。(地域では既に行っている) ○ 小さいところだからできること(メリット)を探す。 ○ 何度も足を運ぶ。 ○ 現場を知っている人と話し合う。 ○ キーパーソンを見つける。 ○ 関係者間の定例会議を開催し、情報共有を図っている。 ○ 行政が縦割りのためうまく話がつながらないこともある。また担当者の異動により話しが進まないこともある。 ○ 社協や公民館がお互いに何をしているのか分からないことがあるので、第1層生活支援 Co と一緒にあいさつに行つてつながりを作る。 ○ 今年度で生活支援 Co の研修を第1層第2層生活支援 Co 全員が終了する。学んだことをこれから活かして関係機関(者)と連携していく。 ○ 生活支援体制整備事業について、受託側(社協)と委託側(介護福祉課)とで話し合いを不定期に行っている。第2層生活支援 Co の定例会を隔月行っている。第1層生活支援 Co がファシリテートして、発表会を行った。 ○ 第1層と第2層の生活支援 Co で、毎月定例会を行っている。市担当課も参加して、情報の共有や方向性について話し合っている。 ○ 地域で活動している個人や団体とつながりを持つようにしている。 ○ 必要に応じてさまざまな機関を参集している。 ○ 市や町の大きさで連携しやすかったり難しかったりしている。 ○ 女川町は行政区との連携を重視している(地区座談会でのつながりから) ○ 地区担当生活支援 Co と圏域の地域包括との情報交換・社会資源の共有を行っている。 ○ 生活支援 Co や庁舎内の連携が難しい。以前地域づくりの部署にいたので、行政縦割りは実感している。 ○ 生活支援 Co 養成研修にケアマネに参加してもらい、意識してもらっている。 ○ 行政・社協・包括等と生活支援 Co の関係性や立ち位置に悩んでいる。 ○ 2年ぐらい話し合いを続けるうちに、言いたいことが言えるようになった。行政とも住民とも、話し合いを繰り返すことが大切だと実感した。 ○ 協議体には様々な団体や機関があり、担当がいなくても情報交換している。 ○ 庁内地域連携会議に社協も参加している。このため、まちづくり関係部署とも連携が図れている。 ○ 個別訪問したケースの相談は包括に繋いでいる。 ○ 受託している社協と地域包括の連携に課題がある。

- 写真を撮って名前を書いて覚える。
- 会議等を通じて仲良くなり、一緒に地域に出る。相手が何をしたいのかが分かり、手伝ったり手伝ってもらえたりする。
- まちおこし団体と一緒に活動したい。
- 行政・社協・生活支援 Co の毎月の定例会が形骸化している。
- 地域福祉・生活支援 Co 定例会（毎月）に市の介護保険課や包括支援も参加している。

テーマ：協議体の運営で工夫していること

- 地域発信でまきこむ。
- テーマを決めるのも協議体委員で。
- メンバーの意見を共有する。
- 口火の切り方。
- お茶やお茶菓子をだして、話しやすい雰囲気を作る。
- 若い世代の方にも入ってもらいたい。
- もっと工夫する余地がある。
- 毎月地区をまわって話し合いをしている。（第3層協議体）
- 50以上の行政区があるので、全部に顔を出すのが難しい。声をかけられたところからおじゃましている。
- 第1層協議体で話し合ったことを第2層や第3層で実現するのは難しいので、今は第2層や第3層での話し合いを活発に行っている。
- メンバーは様々。第1層と第2層の兼務もある。
- 官民一体でやっていくと良い。協議体が地域のプラットフォームになることを目指している。
- 行政区長や民生委員の他、郵便局員にも委員になっていただいている。
- 旧小学校区単位で選定しており、特色が違う。
- メンバーは固定化していない。話し合うテーマにあわせて集まっていたく。
- もともと地区ごとにあつた話し合いの場を第2層協議体として位置付けた。
- 話を振らないと意見が出ない。宝物の情報を資料にしたら、意見が多く出た。
- 情報共有した後、どうなるのか生活支援 Co も悩んでいる。
- 第1層、第2層の協議体に地域包括も参加しているので、地域と顔の見える関係性ができている。
- 協議体の落としどころに悩んでいる。
- 他市町村の協議体の見学をしたい。
- 住民主体を生活支援 Co がフォローする形でうまくいっている。
- 配達系の人に集まってもらった（弁当、郵便、牛乳、灯油、新聞）。商売の延長のちょっとした手助けを発見できた。商業系の人に集まってもらったりと、様々な手法を模索中。
- 地域の写真を使って資料を見せた後で生活支援体制整備の話をしている。
- 協議体は生活支援 Co の活動報告会になっている。意味はあるのか。
- 第1層と第2層に温度差がある。表面的な話ばかり。
- ヤクルト配達員は高齢者の貴重な話し相手になっている。
- 地域の課題を第2層協議体で話し合っているが、ただ話し合っているだけで、新しいものにつながらない。
- 町内会にモデル地区を設置したいと説明に行っている。協議体のことをなかなか

か理解していただけない。

- ワイワイガヤガヤを目標にしている。移動の問題について、委員と一緒にフォーラムに参加した。
- テーマがないと盛り上がらないのか。協議体がきっかけでカフェやサロンができた。
- 推薦された委員（老人クラブ・ボランティア・公民館・民生委員・区長）は、やらされ感があり、積極的ではない。
- 年3回の会議では話が進まない。
- 協議体で話したことが、住民にかえっているのか。
- 第1層協議体は平日日中、第3層は土曜日夜に開催している。
- 課題についての話より、普段行っていることを話し合っている。落としどころに困っている。
- まちづくり協議会の中に生活支援部会があり、既に活動しているが、他の部会員とのつながりが無い。

テーマ：こんなことにアドバイザー派遣をお願いしたい

- 地域復興で新しい事業を他の部署と行うにあたってのアドバイスがほしい。
- 住民対象の研修会でお願いしたい。
- お宝発表会での講演と助言をお願いしたい。
- 生活支援 Co の研修会で講演をお願いしたい。
- 福祉の話になると委員になっている商工会は来ない。上手にまきこむ方法等アドバイスしてほしい。
- 宝物探しの先の展開についてアドバイスいただきたい。
- 地域の方向けに、「お互い様」「お宝」に気づいていただけるような研修会を行いたい。興味を持ってきていただけるようなフレーズも知りたい。

テーマ：その他

- 宝物を発信し続けることが大事。作って終わりではない。頻度が大切。
- 行政や社協、公民館など、様々なサービスを提供しているが、受け手である地域住民が相談しようにも相談できずにいる。サービス提供側が連携して関わる必要がある。
- 宅配関係の業者（新聞、牛乳、郵便、灯油など）で話し合いの場を持つと、見守りの状況など、新たな展開が見込める。
- 地域活動を拾い上げることが地域福祉の推進につながる。住民主体を目指したい。
- 地域連携（町内）には、行政の他部署が所管しているまちづくり関係者とのつながりが必要。
- 情報共有を進めていくと、生きがいがづくりにつながる。
- 委託先の社協とは連携が取れているが、役場内での連携は不十分。
- 第1層と第2層の連携が取れているのかと思うことがある。
- 地域づくりを様々な部門で行っており、一つにまとめられない。
- 関係機関を含めた合同の定例会議が必要。情報交換の場がほしい。行政も動いてほしい。
- 気仙沼市では、生活支援 Co 以外に協力員（地域住民）がいる。生活支援 Co と

	<p>一緒に活動したり独自の情報を生活支援 Co に報告している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今まで地区社協が中心に活動していた。これからは活動を把握する必要がある。 ○ 協議体はわいわいがやがやだが、前向きに進んでいる。 ○ 住民の想いや言葉を拾い集めて代弁していける生活支援 Co という仕事は楽しい。 ○ 「こうしなければ」と硬く考えずに、肩の力を抜いて住民の方と話し続けていけると良い。 ○ 地域ケア会議で、困難事例を出してもらえない。 ○ 生活支援 Co の横の連携ができる集まり（夜の部）があると良い。 ○ 町を活性化するための団体が乱立している（行政・まち協・鳴子再生プロジェクト）。参加する住民も被っている。一緒にできないか。 ○ 気仙沼市は包括が様々な団体と顔の見える関係性づくりとして情報交換会を定期に開催している。 ○ 社協以外が受託している生活支援 Co は、福祉的視点が欠けている。 ○ 協議体の中に社協やまち協と一緒にできないか。 ○ 冊子作りを通してつながりを作っていく予定。 ○ 生活支援 Co 同士の会食会でストレス発散した。孤立しないで済んだ。 ○ 地域包括ケアにつながるということを伝えられない。時間がかかる。 ○ 住民向け研修会は1回では分かってもらえない。繰り返すことが大事。
アドバイザーよりコメント	<p><高橋副委員長></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域のなかではすでに行っていることを、行政から言われたりすると困ってしまうとの意見がありました。ちゃんと自分たちの活動を見てほしいということです。生活支援 Co が宝探しをするのには、行政に理解してもらいたいと思います。 ○ 庁舎内連携が一番難しいです。地域づくりをしている部署がいろいろあること、また公民館や地区社協が活発に活動しているところとかが見えてきています。ただ、お互いに他のことが良く見えていない状況だと思います。まずはお互いを知るところからはじめて、一緒にできることや別々に行うことが分かってくることで協議体にもつながっていくのではと思いました。 ○ 社協や包括や集落支援員などが同じことをやっていると思っている住民が多いです。地域を見てくれる人がもっとれ連携を取ってくれるよ良いと思っています。このことを理解したうえで連携について担当部署と話し合っていただくと良くなるのではないかと思います。 ○ 協議体にお茶やケーキを出したり、活動報告に組織の上司も同席するなど、いろいろ工夫しているようです。この情報交換会で得たことを自分のまちの活動に活かしていただければと思います。 <p><鈴木委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活支援 Co は頑張っているが、うまくいかないことも事実です。だれに責任があるかではなく、やっぱり連携できていないことだと思います。委託者や受託者で共通認識を持つことがまずは大事です。そして地域住民の味方になって、この人たちができるだけここで暮らせるようなお手伝いをする立場だということを、繰り返し伝えていくことだと思います。 ○ 庁内連携や組織内関係が上手くいっていないところは生活支援 Co が大変です。これから事業を進めていくときに、アドバイザーとして連携づくりにお手伝いし

	<p>ていきたいと思えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 住民の人たちが力をつけるためにも、組織のマネジメントする立場の人や協議体の委員に生活支援 Co の研修を受講していただきたいと思えます。 <p><西塚委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 困りごとを解決することやサービスを提供することに走りがちになっているのではと振り返ることができました。もう一度初心に帰って、一人ひとりの幸せを地域の中で実現することを共通理解できました。 ○ 今病院から慢性疾患を抱えて地域に出てくる方が増えてきています。その方、特に単身の高齢者を地域でどのように支えていくのか、みんなで考えていかなければならないと感じました。 <p><県及川主事></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 協議体が進まないという意見が多かったですが、生活支援 Co が課題を整理したり次回につなげたりと、筋道をつける必要があると思えます。 ○ 具体的に「地域にこんな方がいます。地域でどうやって支えていきますか」と事例を出すことも有効だと思えます。委員も身近に感じることで、自分の立場で何ができるかを考えていただきやすいです。 ○ 商工会や農協など、日頃福祉とかかわりの薄い協議体委員には、福祉のを中心に話しても疎外感を持たれてしまう気がします。なので共通言語である「地域」を前提として、地域ではどんなことをしているのか、どんなことができるのかなど、具体例に地域というキーワードを入れてみてはどうでしょうか。
<p>全体講評 高橋副委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加したみなさんがこの情報交換会に慣れて、自分が伝えたいことや知りたいことなど上手にできたのではないかと思います。それぞれのまちの状況は違いますが、情報交換することで、自分のまちの特徴が理解できたのではないかと思います。 ○ 宮城県では、このような情報交換会や研修などを生活支援 Co に限定しないで、関係するすべての人が学べるようになっていきます。それぞれ課題や大変さがありますが、できていることもあるし、他の立場の考えも知ることができます。何より同じ悩みや楽しみを共有できます。ぜひこれからも活動を続けてください。 ○ 協議体が息切れするとか停滞するとかの声も多くあります。ある町では部会を作って、少人数で話し合ったりしています。地域の方もいれて話をすると、部会で盛り上がりたりします。そしてこれを全体の協議体に報告すると、話し合いが活発になったりします。

圏域・会場	仙台 SS.仙台ビル5階 スタンダード会議室仙台勾当台店 A 会議室
開催日時	平成31年2月15日(金) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	仙台市(25), 塩竈市(2), 多賀城市(1), 富谷市(4), 松島町(2) 七ヶ浜町(2), 利府町(3), 大和町(2), 大郷町(4), 大衡村(4) 合計 49名
アドバイザー (運営委員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 仙台白百合女子大学 准教授 志水 田鶴子氏 七ヶ浜町社会福祉協議会 福祉活動専門員 小野 哲 氏 仙台市社会福祉協議会 事務局次長 高橋 健一 氏(午後のみ) 宮城県社会福祉協議会 震災復興・地域福祉部 次長 西塚 国彦 氏(午前のみ)
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：関係機関(者)や所属組織との連携で工夫していること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ いろんなこととつながること。 ○ 地域ごとの関わり。高齢化率の違い。子育て世代を巻き込んで多世代で交流。 ○ たくさんの人とコミュニケーションをとる。 ○ 会った方を似顔絵に書いて忘れない工夫をしている。 ○ 前任が築いた住民との信頼関係を活かしたつながり。 ○ 人と話すことが好きでないとできない仕事。 ○ 組織内部でもお互いさまの精神で付き合うこと。 ○ 行政・包括・生活支援 Co の定例会議(毎月)。情報交換が中心。 ○ 近くにいる社協に電話で相談したり, 事業打合せにも参加していただいている。 ○ 若林区・太白区・泉区は毎月定例会を行っている。若林区は行政が入ったことで業務的になってきた。生活支援 Co 同士のつながりを強めていきたいが, 多忙になってきた。太白区では各包括の事業になるべく地域の人に参加してもらっている。まちづくり予算が取れると内容も膨らむ。泉区では認知症サポーターの活躍の場がテーマになった。ステップアップ講座の開催につながった。 ○ 定例会を通じて, 他地域の生活支援 Co に相談することができるようになった。 ○ 保健師に相談すれば, 地区担当保健師が協力してくれるようになった。 ○ 行政や社協とは定例会議等で顔を合わせている。第3者が入ることで本音が言えないこともある。 ○ 村主催でCLCさんと懇談会を開催した。新たなつながりもあった。 ○ コミセン事務長が社協会長で連合町内会長を兼ねているので, 随時訪問している。 ○ 研修に出て伝達する。朝のミーティングで話をする。包括職員同士役割を持ってもらう(サブを付ける感じ) ○ 年上の利点を生かし一緒に行動しているが, 関係がぎくしゃくして悩んでいる。それぞれの権限, 主導などの立ち位置が分からない。 ○ いろいろな会議があるが, その会議の話だけでなく関連する話し等をしてつながりを途切れないようにしている。 ○ 一緒に楽しむ, 肩書抜きで。 ○ 生活支援 Co が1人なので, 情報の共有を密に行っている。 ○ 社協主催で年1回(3行政区は年2回)交流会を行っている。行政も各課から参加している。 ○ 連携について, 関係機関に投げかけたいが, お互いに忙しい。縦割りもある。それぞれまちづくりの視点はあがるが, 横のつながりが難しい。 ○ 包括3職種で情報共有をまめに行っている。 ○ 活動報告について, 仙台市は年度末に提出, 様式は市全体で共通。地域情報や

課題、計画、評価の記載欄がある。富谷市は毎月報告している。

- 旧黒川郡内社協の生活支援 Co 等支援体制整備関係者が、仙塩 2 市 3 町 + 東松島市の定例情報交換会を視察する予定。
- 包括の生活支援 Co はプランを作らないが、個別支援と地域は全てリンクしているので、何かと一緒に行動を求められる。
- ケアマネ等を対象に 4 回研修を行った。生活支援をどうケアプランに反映できるか。お宝がプランのための事業になってはならない。
- プラン 40 件持ちながらの生活支援 Co 業務。包括全体で業務を行うこととなっているが、実質そうはなっていない。またプランを持っていなくても、困難な個人ケースの支援を担当すると言われる。

テーマ：協議体の運営で工夫していること

- 介護保険運営協議会がいつの間にか第 1 層協議体になった。第 2 層協議体はまだ手つかずの状態。
- 協議体と思うような集まりはあるが、まだ名乗っていない。地域ケア会議が協議体になりそう。
- 2 年間町が運営して、今は社協が行っている。委員を決めずにテーマで選んでいる。災害関係の研修会を行った。
- 協議体に 3 部会があり、生活支援部会はマップ作りを、認知症部会はケアパスを、通所部会は基準緩和型サービスをそれぞれ作った。形を作ることから入ってしまうのは正解なのかと感じた。
- 協議体メンバーにまだ住民が入っていない。住民や関係機関にも入ってほしい。
- 31 年度は担当部課長に生活支援 Co 養成研修に参加していただく予定。係長や事務局長にも参加いただく。組織の上席にもより理解していただきたい。
- 行政主導で住民に参加していただき話し合いを行っている。練習の機会になっている。
- 住民や商店や警察等 200 人が参加してマップ作りを行った。これを広報誌に載せて広げていく。
- 協議体の運営がうまくいっていないところも多い。柔軟に話し合いの形態を変えていく（圏域会議等）
- 話し合いでは「あるもの」に焦点を当てて提案したものが、他のところでは既にあり、既存のものをつなげて「あったらいいよね」をリストアップした。
- 住民への声掛けは「協力して下さい」ではなく、「一緒にやりましょう」と主体性を尊重している。
- 開催前には下準備として、必ず資料を持っていくようにしている。メンバーの状況や想いが伝わるよう工夫している。
- 少しでも話ができるよう、アイスブレイクをしたり事例を出したりしている。
- お茶やお菓子で和やかな雰囲気づくりにつなげている。
- 地域ケア会議が協議体と位置付けている。婦人部会等で出た話を他の地域、みんなでも共有できるようにしている。
- 年 2 回の圏域会議だと、前回の話を忘れてしまっている。地域の各種団体（日赤等）の横のつながりが弱かったが、住民・団体同士が集まったことで困りごとの解決等、つながりが強くなってきた。まちづくり委員会（老人会・日赤・包括・社協・小学校）は毎月開催している。
- 協議体というと住民は引く。生活支援 Co が活躍する場。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 年2回の開催で回数が少ない。第2層生活支援 Co の活動を第1層協議体で理解していただいている。 ○ 第2層は年6回開催している。第1層は条例を作って開催している。 <p>テーマ：こんなことにアドバイザー派遣をお願いしたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 庁舎内の連携のためにアドバイザー派遣をお願いしたい。 ○ 単発ではなく継続的に関わってほしい。 ○ 生活支援 Co や行政職員よりアドバイザーに来ていただいた方が住民には理解いただける。講演会で文句を言う人は熱意がある。 <p>テーマ：その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自由に出ていくことの難しさ（アプローチの仕方）。 ○ 地域の人と話すときの話題づくりが難しい。 ○ イオンとの協働。 ○ 生活支援 Co だけの情報交換会の仕組みが市全体であると良い（区だけではなく）。 ○ 専門職から話し、提案すると、やらせ感が出てしまう。「これ以上何をさせる」と反発もある。 ○ 地区により住民の様子が違うため（高齢者率等）、価値観が違い、同じ目線で話をすることや伝えることが難しい。 ○ 圏域会議で新たなお宝をマップにまとめる提案をしたが、探すことはするがマップ作りには消極的。 ○ 生活支援 Co は住民の支え合いをサポートする立場だが、地域に入っていくのが難しい。生活支援 Co を孤立させないようにしたい。 ○ 包括第2層をバックアップしながら、方針がないとぶれるため、決めていただきたい。成果を数で出すのは難しい。 ○ 第1層生活支援 Co に求められる力、第2層生活支援 Co が求めるレベルが高い。地域に出たい。
<p>アドバイザーよりコメント</p>	<p><志水委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 組織の内外問わず、とにかく話し合っただけで仲良くなって関係を深めることです。 ○ 泉区高森包括の方は、あつた人の似顔絵を描いて忘れないようにしています。これも関係を深めていく素晴らしいツールです。 ○ 若い世代が多く住んでいる地域では、高齢者の話をするとうまく関係を持っていただけないとの意見がありましたが、若い世代が持っている悩みを高齢者のスキルで補えるようなつなぎができれば、多世代交流にもなり地域全体で支え合いができると思います。 ○ 地域にある資源の活用については、例えば富谷のイオンでは場所を提供して健康相談を行ったりしています。利用する人の年齢層など考えながら企業と連携している良い例だと思います。このような例は宝物探しの次の展開につながっていくのではないかと思います。 ○ アドバイザー派遣については、外からの説明のほうか受け入れやすいという意見が多くありました。また段階ごとにアドバイザーに来ていただいて、状況にあ

	<p>わせた助言を頂けると住民もやる気がでるとのことです。アドバイザーは、関係者や住民の背中を押すことは出来ますので、ぜひ活用して下さい。</p> <p><小野委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ これから協議体でお宝発表会を行う参加者から、すでに行ったことのある参加者からノウハウを教えてもらっていたり、この情報交換会の意義がこのようにあります。ここでのつながりも、これからの活動に役に立ちます。 ○ 小学校区ごとに集まりの場を持って、マップ作りをこれから行う包括のお話がありました。課題は多くあっても、住民の方々と何かを一緒に行うことはつながりづくりにはとても重要で、この中から買物情報準備会が出来上がったというように、できることから少しでもやっていけばよいと思います。 ○ 協議体やこれからの活動について、やっていることを広げていくことも大事ですが、やってみたいなどかできたらいいな、みたいなことを協議体で話をしていると、盛り上がり、何かヒントみたいなものを得られるのではないかと思います。 <p><高橋委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 仙台はまだ協議体が正式にはありませんが、それに準じた集まりなどで情報共有したりと工夫しています。具体的にはお宝の情報を資料として事前に参加者に渡して、一方通行にならないように話しをしていただけるよう下準備をすることも良いのではないかと思います。 ○ 話題提供も、参加者が興味をもてるようなものからはじめて、それを深めていくのも良いと思います。 ○ 地域ごとに強みや弱みがありますが、意外と自分の地域のことが分からないものです。なので、それを参加者で確認し合うことから始めるのも結びつきを深めたりできて良いのではないかと思います。 ○ 地域ケア会議も大事ですが、町内会や地区社協の集まりにぜひ参加して下さい。それぞれの特徴を理解しストックしておく、別な地域での課題解決に役に立つかもしれません。そのような役目も生活支援 Co にはあります。 ○ ゴミ屋敷の問題やバイクの騒音問題など、地域にはさんざマナ困りごとがあります。それを生活支援 Co だけで解決できるわけではありませんので、庁舎内連携や他職種連携が必要になります。関係者に集まってもらって勉強会を行うことなど、できることからはじめてらよいと思います。 <p><西塚委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ サービスを整えば住民の暮らしは良くなると思っている方が担当課や庁舎内にいると、協議体もサービスづくりになってしまったという意見がありました。あらためて庁舎内での体制整備に関する考え方を共通認識する必要があります。このような場面でアドバイザー派遣は有効だと思いました。 ○ もともとは一人ひとりに向き合って、住民の幸せを実現するために仕事をしてきました。いつの間にか困りごとに対応してサービスを作り提供するようになってきています。あらためて普段のつながりを確認して、地域の中で必要な時にサービスが提供できるようにと理解しなければならぬと思いました。
<p>全体講評 高橋副委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動すれば、いろいろ悩みは出てきます。この情報交換会では、お互いに話し合いをする中で得られるものが多かったのではないのでしょうか。まさに情報交換会は参加しているみなさんで作り上げているものです。協議体も同じ考えで、同じ目的を持った人たちが集まって話しをすることで、良い考えができたり支える仕組みができたり

	<p>するのではないのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none">○ 若い子育て中の親とご近所のお年寄りが仲良くなれば、子供の面倒を見てあげて母親が出かけたり用事を済ませたりできる、できることを身近なところで無理なくする、これが地域支え合いの本質です。生活支援 Co や関わる方は、集まりの場でいろいろな情報を集めて、つなぎ合わせていくことでうまくいきます。そのためにも木の根の部分の掘り起こしをていねいに行ってください。○ 協議体については、町内会レベルで話し合いをするととても盛り上がります。参加者の身近な地域のことだからです。第1層しかない市町でも、このような小さな集まりをしながら全体には炬がっていくようにすればよいと思います。○ この情報交換会も研修も、みな仲間づくりです。これからも様々な機会を用意しますので、ぜひ参加して下さい。
--	--